



TITLE:

米國文化社會學(上)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 米國文化社會學(上). 經濟論叢 1930, 31(3): 329-354

ISSUE DATE:

1930-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129932>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十三卷 第三號

昭和五年九月一日發行

論叢

法人配當源泉課税の長短……………法學博士 神戸 正雄

米國文化社會學……………文學博士 米田庄太郎

貨幣の中心機能……………文學博士 高田 保馬

說苑

世界商品價格の決定……………法學士 作田 莊一

京都市^{に於ける}米の小賣相場に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

國家經費の轉嫁に就いて……………經濟學士 小山田 小七

雜錄

近世の人口について……………經濟學博士 本庄榮治郎

支那に於ける水利經濟……………經濟學士 大上 末廣

ソウエート露西亞の都市財政……………經濟學士 大谷 政敬

地券について……………經濟學士 黒羽兵治郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

米國文化社會學(上)

米田 庄太郎

私は本號から、「數學的經濟學批判」を掲載し始める積りであつたが、是非參考したいと思ふ二三の著書が、まだ外國から着しないので、右の論文を完成して居ないから、本號及び次號に於ては本論文を公にすることゝした。

(一)緒論、(二)米國文化社會學の由來、(三)米國文化社會學の基本的概念及び原理(以上本號掲載)、(四)米國文化社會學論争、(五)米國文化社會學批判、

一 緒 論

私の今知る處では、文化社會學の概念の萌芽が、始めて稍々明かに認められるのは、バールトが千八百九十七年に公にせる「社會學としての歴史哲學」第一卷第一版に於てあるかと思ふ。(Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, 1897.) 同書第四章「生物學的社會學」に於てバールトは先づスペンサーの社會學を論究し、批評する際に「さればスペンサーは只社會の自然時代の社會學を與へたゞけで、文化時代の社會學を與へて居ない。後者は更に著述さる可きである」と述べて居るが、此の語は社會の自然時代或は自然社會の社會學の外に、文化時代或は文化

社會の社會學の建設さる可きことを、即ち自然社會學の外に文化社會學の建設さる可きことを、指示する或は認めるものと解することが出来る。そうしてかく解するに於ては、マックス・シェラーが現實社會學 (Realsoziologie) から區別して立てんとせる文化社會學の概念は、少なくとも形式的には、バールトの文化時代の社會學の概念を發展させたものと、社會學史上認め得られるのである。(Max Scheler, Probleme einer Soziologie des Wissens, in Versuche zu einer Soziologie des Wissens, 1924.)

但し、マックス・シェラーは eine Trieblehre を必然的前定とする現實社會學と、eine Geisteslehre を必然的前定とする文化社會學とに、社會學を二分せんとしたと思はれるが、バールトはかゝる意味にて自然時代の社會學とは、つまり社會發達の異なる階段にあるものとして、兩者を合せて研究するものと考へたのである。此の事は上擧の彼の著作の最後の章に於て論述されて居る Skizze der eignen Ansicht des Verfassers に就て見れば明白である。併し同章は同書第二版以後削除されて居る。

併し今日獨逸に於て盛んに唱へられて居る文化社會學なるものは、マックス・シェラーの見解によりて代表されて居るが如き、現實社會學或は自然社會學から區別される意味での文化社會學を意味するだけのものでなく、更に否な寧ろ、社會學とは即ち文化社會學を意味するもの、つまり文化を一定の仕方て研究するものが、即ち社會學であると思ふ見解が、一般に行はれて居ると思はれる。然るに今此の見解の如く、社會學を自然社會學と文化社會學とに區別するのでなく、夫れは總て文化を研究するものであると見るならば、特に文化社會學と云ふ語を用ひる必要はない様に思はれる。然らば何故に、かゝる見解を抱いて居る人々もやはり文化社會學なる語を用ひて

居るのであるか。私は夫れには種々なる理由があると思ふ。併し此處で詳しく論ずる暇はないから、只其の二三を簡単に述ぶるに止めるが、先づ英米佛等の社會學者は一般に社會學を一の自然科學として建設せんとせらもの、又するものであるに對して、今日の獨逸の社會學者は之を一の文化科學、或は文化哲學の一學科として建設せんと企だて、居ると云ふことが、其の一理由であらうと思はれる。併し夫れよりも更に重要な理由と思はれるものがある。

抑々社會學が英佛米伊等の諸國に於て、盛んに唱へられて來た後も、種々なる理由によりて、獨逸の學者は一般に社會學を一の獨立せる學問として認めることを欲しなかつた、又社會學と云ふ語を用ひることを好まなかつた。そうして獨逸に於て社會學が、一般に一の獨立なる學問として認められ、又社會學と云ふ語が一般に用ひられて來たのは、千九百七年にヴィンに於て、又翌年ベルリンに於て、夫れ夫れ社會學會が設立された後であると思はれる。しかも獨逸に於て社會學の研究が殊に大に勃興して來たのは、世界大戰争後である。然るに其の際先づ獨逸の社會學者が、新しき社會學を建設せんとして大に力を注いだのは、ジムメル（ジムメル）の社會學概念の發展であつた。即ち社會學は只社會の形式を研究するだけのものであると見る形式社會學概念の發展であつた。そうして一時形式社會學の種々なる展開が、獨逸社會學界を風靡して居たと云ひ得られる。

然るに社會の形式だけを研究するのが社會學の任務であると思はるに於ては、社會の内容と認め

られる文化の研究は、社會學の範圍に屬しないことは當然である。かくて形式社會學の發展の最も代表的なるものと見做され得るフィアカントやフォン・ウイゼの社會學にありては、文化の研究は全く其の範圍外に置かれ、フォン・ウイゼは社會學の範圍をジムメルよりも廣く解したに拘らず、只社會的構成物、或は彼が關係構成物と稱するものを、其の中に取り入れるに止まり、他の文化構成物の研究を他の社會科學の研究に譲り、フィアカントは Gesellschaftslehre の外に Kulturlehre を建設せんとして居る。(Vierkandt, Gesellschaftslehre, 1923. 2. Aufl. 1927. Von Wiese, Allgemeine Soziologie, Teil I, 1924. Teil II, 1929.)

然るに間もなく、社會の形式や、社會其物を研究せんとするだけの社會學に對する不滿の念が起り、且つマックス・ウェバーの社會學論を祖述し、或は發展せんとする傾向の發達するにつれて、社會學が社會に關する満足なる知識を與へんとはるに於ては、決して只社會の形式或は形態を研究するだけに止まる可きものでなく、更に進んで社會の内容或は實質をも研究せねばならぬ、否、社會の形式の研究は寧ろ社會學の土臺を据へるもの、或は其の準備をなすものに過ぎないので、社會學其物は本來社會の内容或は實質を究明す可きものであると見る見解が發達して來た。マックス・ルムプは既に千九百二十四年に Von rein-formaler zu typologisch-empirischer Soziologie として論文を公にし、純粹形式的社會學から實質的内容的社會學、即ち彼が定型學的經驗的社會

學と稱するものへ發展するのが、獨逸社會學の進む可き眞實なる途であることを主張して居るが (Max Rump, Von rein-formaler zu typologisch-empirischer Soziologie, Schmollers Jahrbuch, 1924.) 彼の如く社會の實質的内容の研究を、定型學的經驗的なる研究と認めるか、又は文化の哲學的考究と見るかを問はず、とにかく社會學の概念に於て、社會の實質的内容の研究を重要視する傾向は其の後益々發達して來た。そうして社會の實質的内容と云へば、夫れは學問的に如何に取扱はる可きものと考へられるかを問はず、文化に外ならない。かくて只社會の形式或は形體のみの研究に限らんとする形式社會學に對して、特に社會の實質的内容の研究を重要視する社會學の新しき方針を表示する爲めに、文化社會學と云ふ語が今日盛んに用ひられて來たのである思はれる。

尙ほ今日文化社會學なる語が、獨逸に於て盛んに用ひられて居る一理由として、此處に注意して置きたいものがある。夫れは近來獨逸の學者が、殊に文化と云ふ語を愛好する傾向の大なることである。其の深い歴史的理由に就ては、私は拙著「現代文化概論」中に少しく述べて居るから、此處では繰り返して述べようとは思はないが、とにかく獨逸の學者は千八百九十年代までに、既に文化史なるものを建設して、歴史研究に於ける新しき方針を立て、居たが、同年代に入りてより從來獨逸學者の愛好せる精神科學なる語に取り代はつて、文化科學なる語が盛んに使用されて來た(但し詳しく調らべて見ると、文化科學なる語は餘程以前から時々用ひられて居たものと見え、岩崎男爵が京都帝國大學へ寄贈された「ビュツヒャー文庫」中から私が見出した處の、Gesellschaftswissenschaft と云ふ語を題名として用ひた最初

の著作と思はれる千八百三十八年出版、M. v. Laveigne-Pegulhen, Grundzüge der Gesellschaftswissenschaft, Erster Theil に於て、著者は Gesellschaftswissenschaft 及び die Bewegungswissenschaft, die Produktionswissenschaft, die Kulturwissenschaft 及び die Staatswissenschaft の四部門) 又ヤハリ從來獨逸學者の愛好せる精神哲學なる語に取り代りて、文化哲學に別つて居るのである。

なる語が盛んに用ひられて來た。そうしてかゝる形勢の下で、若し獨逸で社會學の研究が盛んに行はれてくれば、當然文化社會學なる語も、大に流行してくるであらうと云ふことは、豫想し得られたのであるが、果せるかな、世界大戰後獨逸に於て急に社會學の研究が勃興して來たのにつれて、文化社會學が唱へ出され、又此の語が大に流行して來たのである。

(但し最近には獨逸で、さきに愛好された精神とか精神

的とか云ふ語の使用が、復活されて來る傾向が見へる。既に文化史と云ふことが流行して居る。かくて何でも獨逸の學界を摸倣することに忙しき我國の學界に於ても、近來精神史と云ふ語が流行し來り、日本精神史の研究とか、精神史上より見たる日本の何々とか題する著書や論文が公にされて來た。そうして今後獨逸では文化と云ふ語の流行がすたつて、もとの精神とか精神的とか云ふ語の流行が復活してくるかも知れない。かくて文化科學はもとの如く精神科學又文化哲學はもとの如く精神哲學と稱せられることとなり、そうして文化社會學と云ふ語の流行もすたつて、精神社會學と云ふ様な語が大に流行してくるかも知れない。實際に於て、マックス・シェラーの如く文化社會學は eine Geisteslehre を必然的前定として建設する可きものとすれば、之を精神社會學と稱する方が文化社會學と稱するよりも一層適當であるかも知れないので、此の場合に特に文化社會學と云ふ語を用ひねばならぬ理由はないと思はれる。)

却說今日獨逸の社會學界にありては、上に簡単に述べしが如き種々なる理由によりて、殊に社會の形式或は形態の研究を唯一の社會學の任務と見る見解の勢力が衰へて、社會の實質的内容の研究を重要視する見解が勢力を得るに至り、そうして其の實質的内容とはつまり文化に外ならぬが故に、此處に所謂文化社會學なるものが大に發達して來て居るのである。そうして我國では文化社會學と云へば、一般に獨逸特有の社會學であるが如くに考へられる傾向があるが、併し此處に

注意すべきは、最近米國に於ても、社會學上文化の研究を重要視する傾向が大に發達して來たこと、又其の傾向を特に表示する爲めに文化社會學 (cultural sociology) と云ふ語が用ひられて來たことである。然るに米國に於ける文化社會學なるものは、獨逸に於ける文化社會學を模倣して發達して來たもの、或は其の影響を受けて發達して來たものでなく、同國に於ける社會學の歴史の特有の事情及び理由から發達して來たものである。隨ふて又少なくとも外觀上では、米國の文化社會學は獨逸の文化社會學と異なつて居る。かくて今日世界の社會學界を通觀すると、文化社會學の發達に二つの方針が區別され、そうして吾人は其の一を獨逸文化社會學、其の二を米國文化社會學と稱することが出來ると思ふ。併し獨逸人でも亦米國人でもなく、日本人である吾々日本の社會學者は、獨逸文化社會學の方針に盲従す可き義務もなければ、又米國文化社會學の方針を其の儘に遵奉す可き理由もない。そうして兩者の差異をよく批判的に辨別すると同時に、又兩者が根本的に合致する點を深く觀破し、洞察して、日本の社會學者獨得の立場或は見地或は方針を樹立す可きである。私は右の主旨から、本論文に於て特に米國文化社會學を考察し、先づ其の由來や、其の根本的概念及び原理や、又米國に於ける文化社會學に關する論爭等を簡單に論述し、そうして終りに獨逸文化社會學と比較しつゝ之を批判して、私自身が所謂文化社會學なるものに對して如何なる態度をとつて居るか、換言すれば私は私の社會學に於て、文化の研究を如何に取扱はん

とするかを、簡単に論述したいと思ふ。

二 米國文化社會學の由來

米國に於ける文化社會學の發達の由來は、獨逸に於ける文化社會學の發達の由來と、少なくとも外觀上では異なつて居る。但し私は私の社會科學方法論上から深く考察すると、根本的には兩者の間に多くの一致が存在して居ると考へるのであるが、其の事は本論文最後の一節に於て論ずることとする。

今米國に於ける文化社會學の申來を深く了解する爲めには、先づウオード、ギッディングス、スモール、ボールドウィン等の同國社會學の元老によつて創設されたる諸方針は、如何なるものであつたを考察し、次に其等の諸方針がクレー、ロス其の他の幾多の所謂中老社會學者によりて如何に發展されたかを吟味し、更に夫れより米國心理學に於ける行動主義 behaviorism の發達の影響を受けて成就されたる、米國社會學に於ける行動主義の發達を考究して、社會學は特に人間の行動殊に團體行動或は集團的行動 group behavior or collective behavior を研究するものであると見る社會學概念、即ち行動主義社會學概念が、如何にして一般に米國社會學界を風靡するに至つたかを究明し、そうして専ら心理學、生物學及び地理學等に依頼せんとする行動主義社會學

に於て、如何にして其の行詰りを意識する人々が現はれて來たかを考究し、其の際米國に於ける文化人類學 (cultural anthropology) の發達が、社會學の上に如何に影響して、此處に文化社會學が發達して來たかを究明せねばならぬ。併し此處に米國文化社會學の由來を、其等の諸階段を一々論究して、詳しく究明することは到底不可能であるから、それで只最後の二階段、即ち行動主義社會學の行詰りと、文化人類學の影響とを簡単に述べて、其の直接の由來をヤハリ簡単に説述するだけに止める。但し私の見る處によれば、米國文化人類學は一般的事實としては、直接には行動主義社會學が行詰つて來たことと、其の際に米國文化人類學が重大なる影響を及ぼしたこととの、二つの理由から生まれたものである。

然らば先づ行動主義社會學は如何にして行き詰つたか。詳しく云へば行動主義社會學者中に、其の行詰りを意識する人々が如何にして現はれて來たか。今行動主義社會學の最根本原理は、人間の行動は其の個人的なるものも、亦團體的或は集團的なるものも、つまりは外部から與へられる刺激に對して、人間が内部に有する推進力 (drives) によりて反動すること、或は反應することによりて成立すると、見ることであると思ふ。そうして少なくとも形式的には、人間の一切の行動は結局は右の原理によりて一般的に説明されると云ひ得られる。尙ほ深く推し究めて行けば、人間の一切の行動は、結局は右の原理によりて説明し得らる可きものであるとも云ひ得られる。併

し具體的事實、即ち人間の具體的行動を其儘に即ち具體的に考察するに於ては、右の原理によりて直ちに其儘充分或は充當的 (sufficiently or adequately) に、説明し得られないものの多いことが發見される。否な何れの具體的な人間行動も詳しく考察すれば、決して右の原理によりて其儘充分或は充當的に説明し得られるものでないことが覺られる。更に人間行動の變動、殊に現代文化社會に於て見られるが如き、瀕繁な又急激な變動、つまりは現代文化人の行動の瀕繁な又急激な變動は、到底右の原理によりて充分或は充當的に説明し得られるものでない。是れ外部からの刺激を自然的環境の與へる刺激と見るに於ては、自然は一般に恒定的なものであり、又人間の内部からの推進力即ち心理的推進力も、一般に恒定的なものであるからである。尙ほ自然も亦心理的推進力も一般に恒定的なものであるとすれば、相異なれる社會團體又は夫れに屬する個人が、同じ刺激に對して、同じ推進力からして、相異なれる反應をなす所以や、相異なれる刺激に對して、相異なれる推進力からして、同じ反應をなす所以なども、到底説明し得られなくなる、かくて具體的な人間行動や、其の變動を充分或は充當的 (sufficiently or adequately) に説明する爲めには、少なくとも行動主義の原理に於て認められて居る説明的因素以上の或説明的因素をも、認めねばならぬことが覺られるのである。かくて如何なる新しき説明的因素を認む可きかは、行動主義社會學に於て甚だ重要な根本問題となつて來たのであるが、此の際文化人類學の發達が、社會學

の發達に重大なる影響を及ぼし、そうして其の影響の下に此處に文化社會學が生まれて來たのである。

文化人類學一般の由來及び發達に就ては、此處に詳しく論述する暇はなく、又其の必要もないで、只米國に於ける其の由來及び發達に就て、且つ夫れが特に文化社會學の發達に及ぼせる重要な影響の方面から見て、極簡単に述べるに止めるが、(但し文化人類學の由來及び發達に就ては、簡明にしてしかも深奥なる批判的考察が、米國文化人類學の建設者の一人 Goldenweiser により、Barnes の編纂せる The History and Prospects of the Social Sciences (1925) 中に寄稿されたる Cultural Anthropology に於て論述されて居る。) 今米國に於ける文化人類學の發達を開始したるは、フランツ・ボアス(Franz Boas 私が直接に人類學を學んだ私の人類學上の唯一の先生)である。ボアスはベルリン大學在職中から、既にアメリカン・インディアン人の研究に専ら力を注いで居たので、其の緣故でニューヨーク博物館の人種學部長に招かれ、又コロンビア大學の人類學教授に任せられた。彼は先づアメリカン・インディアン人の神話及び言語の研究に力を注いだことからして、遂に人類學の研究に於ける生物學的見地や地理學的見地に對して、歴史的見地を大に重要視するに至つたが、其の見地からして米國に於ける文化人類學の發達を開始したのである。されば米國文化人類學者は、ボアスがアメリカン・インディアン人の研究に、歴史的見地を輸入せることを以て、彼の最も重要な一貢獻と認めて居る。そうしてボアスがアメリカン・インディアン人の研究に於て新たに樹立せる歴史的見地と云ふは、つまり部族の文化を其の限定されたる歴史的地理的郷

士 (historico-geographical homes) に於て、地理的園境や周圍の諸文化との關係、及び文化の諸方面間に作られたる、幾多の且つ屢々錯綜せる心理的連合との關係に注目して、詳しく研究すると云ふ見地である。ボアスは此の歴史的見地を具體的に表現するものとして、文化地域 (cultural area) の概念を確立したのであるが、此の概念は後に述べる處によりて知られる如く、文化人類學に於て、又文化社會學に於て、最も重要な基本的一概念となつて居るのである。又此の概念に結び附いて、限界地域 (marginal areas) や文化複合 (culture complex) や、文化模型 (culture pattern) や、其の他の基本的概念が構成されたのである。

ボアスは本來具體的モノグラフィ的研究を偏愛して、専ら之れに力を注ぎ、抽象的純理論的な論述を好まぬ傾向を有つて居たから彼は彼の理論的及び方法論的原理を包括的組織的に説述して居ない。隨ふて之を包括的に把捉して、簡單に説述することは困難であるが、其後彼の方針に従ふて文化人類學の發達に協力せる、多數の有力なる研究者は、彼の歴史的見地を種々に發展させ、今日米國文化人類學者間に、其方法論的指導原理として一般に承認されて居るものが確立されて來た。そうしてゴルデンワイザーの説述によれば、其等の原理の主要なるものは左の如くである。即ち探究を限定されたる地理的歴史的地域 (districts) に集中し、之を其の年代的深さに於て、又部族間の接觸に於て見られる側面的地理的廣がり に於て研究すること、文化諸特徴或は特徴諸複

合の配布を跡つけるに於て、客觀的方法を適用し、又文化諸特徴の連合、交叉及び同化の研究に於て心理學的方法を適用すること、部族文化或は地域文化の記述に於て、殊に地方的に生起せる、又は他から輸入されたる新しき特徴の吸収に關して、「様式」及び「模型」(“style” and “pattern”)の概念を使用すること、部族的境界内に於て用ひられる差異法或は示差法(differential method)を亞^{ブトライバル}部族的及び個人的差異の研究に擴張すること、意味或は評價の眞實性又は微妙な差異が問題となる場合には言語學的方法を採用すること、文化複合の歴史的成分と心理的成分とを辨別し、切離すること、進化主義及び圈境主義を其の粗雜な古典的諸形體に於ては斷然排斥すること、「傳播」或は「蔓延」(“diffusion”)、「獨立發達」、「並行」(“parallelism”)「輻合」或は「收斂」(“convergence”)等の概念を、獨斷的公準としてではなく、發見の道具として適用すること等。

ボアスの開始せる方針は、多數の米國人類學者殊に Wissler, Goldenweiser, Kroeber, Lowie 等の諸大家によりて大に展開されて、此處に米國文化人類學が建設されたのであつて、そうして其の方法論的原理は一般的には、上に述べし如くに、大體上公式化されて來たのであるが、併し其等の諸家の設定せる實質的原理の間には、種々なる差異が發見される。されど此處に其等の原理に就て詳しく述べる暇はないから、只文化社會學に及ぼせる影響から見て、特に重要と思はれるものだけに就て、少しく述べて置きたいと思ふ。

後に文化社會學の基本的概會及び原理に就て、又夫れに關する論争に就て述べる處によりて稍々詳しく知られる如く、文化を以て超個人的或は超有機的なものと見る思想、及び夫れに基いて立てられる文化決定主義 (cultural determinism) の思想は、文化社會學に關する論争に於て、甚だ重要な根本的一問題となつて居るが、此等の思想は文化人類學者中、殊にクレバー及びローキによりて、先づ盛んに主張されたのである。

クレバーは文化の超有機的、超個人的、超心理的性質、及び歴史的事象の決定主義并に不可避性を大に強調し、そうして社會的なものとは即ち文化的なるものを意味し、又一切の文化は前在の文化によりて決定されるものなるを主張した。かくて彼は歴史に於ける個人の力を大に縮少せんとした。(Kroeber, *Eighteen Professions*, *American Anthropologist* 1914. *The Suroganic*, *ibid* 1917. *Anthropology*, 1923) 又うして彼の根本思想は「十八ヶ條の宣言」に於て、最も明かに學ばれると思ふから、左に之を擧げて置く。

(1) 歴史の目的は文明の全體と社會的事實との關係を知ることにある。(2) 歴史の研究する材料は人間ではなくして人間の仕事或は業績である。(3) 文明は人間によりて支へられ、實現され、人間を通じて存在するが、併し夫れ自身に於て存立し、人間の生活とは異なる部類をなす一の實體である。(4) 歴史家は人間の一定の心理的構造を前定せねばならぬが、併し之を社會現象の分析に使用す可きでない。(5) 眞實なる本能は社會現象の根柢及び始源に存立するが、併し歴史家は之を考察し、或は取扱ふことは出来ない。(6) 個人的なるものは、例解としての外は全く歴史的價值を有しない。(7) 地理的或は物理的圍境は文明によりて利用される原料であるが、文明を形成し或は説明する一因素ではない。(8) 文明の運載者としての總ての人種の絶對的平等及び同一性は、歴史家によりて前定されねばならぬ。(9) 遺傳は歴史に於て何等の役目をも演じたとは認められ得ない。(10) 獲得によ

つての遺傳と云ふことは、生物學的にも、歴史的にも、同等に信じ得られない怪奇である。(11) 淘汰及び有機的進化の他の諸因素は文明に影響するものと認め得られない。(12) 所謂野蠻人なるものは、動物と科學的に教育された人との間の移り目でない(13) 社會的種 (social species) とか、又は標準的文化類型とか標準的文化階段とか稱せらる可きものは存在しない。(14) 民族心なるものは存在せず、只文明が存在するのみである。(15) 歴史に於ては、物理的化學的科學の法則と同様な法則は存在しない。(16) 歴史は必須的條件を研究するものにして、原因を研究するものでない。(17) 歴史の因果性は目的論的なものである。(18) 終りに嚴格なる生物學的研究が、歴史の結果や研究の仕方を無視するのと全く同様に、歴史にあつては、生物學、心理學或は自然科學に於て行はれる測定或は決定や、方法は用ひられない。

ローキもクレバーと同じ見解をとり、文化的變化、或は人間の團體的行動に於ける變化は、常に一定の文化的條件によりて決定されるものにして、そうして吾人は其等の條件によりて、文化的變化を充分に説明することが出来るので、かくて個人心理的條件に訴へる必要は、全く存在しないと論じて居る。(Lowie, Culture and Ethnology, 1917.) かくてクレバーやローキは文化人類學に於て、佛國の社會學者ジュールケム及び其の派の人々が、社會學に於て樹立したのと同様な原理を樹立したのである。然るにジュールケムは既に千八百九十年代に、彼の社會學の原理を確立して居たのであるから、年代的に見ればクレバーやローキの一派の米國文化人類學は、つまりジュールケム派の社會學の原理を、人類學に輸入せるものであると見做し得られると思ふ。

併し米國文化人類學者は、總てクレバーやローキの一派の人々の如くに、文化決定主義、即ち社會學に於ては社會學主義ソシオロヂズムと稱せられるものを唱へて居るのでない。クレバーやローキと同様に、米國文化人類學の建設者として重要視さる可きゴルデンワイザーやウイスラーやトーマス

なぞの人々は、決して文化決定主義を唱へて居るのではない。(Goldenweiser, Early Civilization, 1922. Wissler, Man and Culture, 1923. Thomas, Source Book for Social Origins, 1909) いやいやもなく、彼等も大に文化を重要視するのである。彼等の論する處によれば人間は人間團體の成員として、其の行動に於て常に文化的實在であり、個人の行動も亦團體の行動も、如何に深く本能及び地理的環境に根柢を有するにせよ、當面には一の歴史的或は文化的產物として考へられるに非らずば、決して充分に理解し得られるものではない。個人的及び團體的行動の模型は文化的模型にして、そうしてあるがままでは其の歴史的アンティシデンツ前件を理解することなしには、到底理解し得られるものでない。個人心も亦個人的行動も、あるがままでは有機的進化の生產物であるよりは、遙かにより多く歴史的文化的生產物である。しかも文化的過程は社會的過程の全體ではなく、又只文化のみが人間の心意及び行動を決定するのではなく、そうして文化的及び社會的過程に於て人間の個性及び人格者は重要な一の役目を演ずるのである。トーマスは既に千九百九年に公にせる上擧の著書に於て、文化は危機、注意、制御及び習慣形成等によりて建設されて居るが、其の建設の過程に於て非凡な創造的個人が常に一の重要な因素であつたこと、かくて文化は人間精神の生產物であること、しかも人間團體が、文化の一定の水準に一たび到達したとすると、主として其の文化水準が、其の團體の成員たる個人の習慣及び知能を決定し、かくて又文化發達の次の階段を決

定するものなること等を詳しく論述して居た。

却説私は此處では米國文化人類學に就て、右に述べ來りしより以上に詳しく説述することが出來ないが、とにかく右に述べ來りしだけでも、米國文化人類學が、人間の個人的及び團體的或は集團的行動の決定的一因素として、文化は如何に重大なる意義を有するものなるかを、明かに論證したことを了解し得られると思ふ。要するに米國文化人類學者は、主として原始人民或は自然民族に就てではあるが、其の個人的及び團體的行動を、あるがままに充分或は充當的に (sufficiently or adequately) 理解し説明する爲めには、吾人は先づ第一に文化の方面から研究し始めねばならぬこと、即ち彼等の云ふが如く文化的接近 (cultural approach) を遂行せねばならぬことを明かにしたのである。そうして彼等の詳しく具體的モノグラフィ的研究によりて、人間社會の研究には、生物學的接近や、又心理學的接近や、又地理學的接近などが、結局は如何に重要であるとしても少なくとも當面には先づ第一に、文化的接近の重要なことが廣く承認されて來た。かくてさきに述べしが如き意味にて、行詰りを意識して來た行動主義社會學者は、文化人類學の所説に従ふて社會學に於ける人間行動の分析にありても、先づ文化を重要視し、文化的接近 (cultural approach) を行なふ必要を認め、そうして文化人類學の方法論的原理を社會學に輸入し、更に其の實質的原理をも輸入して社會學の新しき發展を企だてんとし、此處に米國文化社會學が生まれて來たのである。

ある。但し私は米國社會學の發達の一般的事實に基いて、米國文化社會學の由來を上に述べ來りし如くに説明したのであるが、併し米國文化社會學の出現以前の一定の社會學の立場から、之を攝取して其の立場の新しき發達を圖らんとする見地からして、米國文化社會學の由來を異なる方面から説明することも出来る。そうして私はかゝる説明の一例として、殊に勝れたる一例として、此處にエルウッドが「リッピンコット社會學叢書」中の一冊「社會科學に於ける軌近の發達」に寄稿せる論文「社會學に於ける軌近の發達」を擧げて置きたうと思ふ。Ellwood, Recent Developments in Sociology, in Recent Developments in the Social Sciences, 1927 (Lippincott's Sociological Series), エルウッドは同論文の中に述べて居る如く、「かくて人間團體の社會學は主として文化の一研究、即ち人間團體の社會的價值、社會的態度、傳說及び慣習の一研究となつて居る」と認めるのであるから、彼も今日ではやはり廣い意味での米國文化社會學者である。そうしてエルウッドのもとの立場は、私が二十數年前から、今日に至るも、常に新たに發展させつゝも、しかも根本的には固持して居る立場と、種々の點に於て似て居るのであるから、彼のもとの立場から、今日の米國文化社會學を彼の社會學に取り入れて、之を改造せんとする企たてには、私の同意を得る點は少なくないのである。それで本論文最後の一節「米國文化社會學批判」に於ては、其等の點に就て簡單ながら論じたいと思ふ。

三 米國文化社會學の基本的概念及び原理

前節に述べし處によりて知られる如く、米國文化人類學は其の實質的原理に於て見れば、根本的には二つの方針に於て發達して居ると見做し得られるので、其の一はクレーバー、ローキ等によりて代表される處の、文化決定主義或は大に夫れに近き主義を奉じ、心理的因素や生物學的因素を重要視せず、又個人の勢力を全く或は殆んど全く無視せんとするもの、其の二はウイスマー、ゴルデンワイザー、トーマス等によりて代表される處の、文化を大に重要視するが、併し之を以て唯一の、或は殆んど唯一の決定因素とは認めず、心理的因素や生物學的因素をも、又個人の勢力をも重要視するものである。かくて文化人類學の影響を受けて發達せる米國文化社會學に於て

も亦、根本的には右の二つの方針に大體上相應する二つの方針が見出されるところと思ふ。併し今日米國文化社會學として特に注目され、又後に述ぶる如くに米國文化社會學論争の主題となつて居るものは、文化人類學の第一の方針、即ち文化決定主義文化人類學とも稱す可きものに、大體上相應する文化社會學の方針即ち文化決定主義文化社會學とも稱せらる可きものであると思ふ。又特に米國文化社會學と稱せられるものとしては、其の方針は其の特質を最ともよく發揮するものと思はれる。夫れで本節に於て米國文化社會學の基本的概念及び原理を、簡単に説述せんとすることに當つて、私は主として其の方針の文化社會學に就て考察することとする。そうして又右の方針の米國文化社會學の基本的概念及び原理を、簡単に説述せんとするに當つて、私はミネソタ大學のウイレー教授が「米國社會學雜誌」昨年九月號に公にせる論文「文化概念の正當性」中に述べて居ることに依ることとする。是れ私は同論文中に彼の論述して居ることは、右の方針の米國文化社會學の最近の傾向を、最ともよく代表して居ると考へるからである。(Malcolm M. Willey, The Validity of the Culture Concept, American Journal of Sociology, September 1929) (ウイレーは新進學者にして、既に幾多の有益なる論文を公にして居るが、更に Wilson D. Wallis と協力して、近々に Readings in Sociology と題する新著を出版せんとして居るので、其の事は近着の米國の社會學雜誌に豫告されて居る。) 但し以下述べる事は、單にウイレーの論述を其の儘に譯したものでなく、主として彼の論述に依つて居るが、併し又他の文化社會學者の論述をも參考し、そうして米國文化社會學の基本的概念及び原

理の最近の發達を、簡單に理解するに便利なる様、私自身の考へによりて數項に分ち、且つ各項に夫れ夫れ題名を附したるものである。

社會學の一般的概念 文化の研究、即ち文化の始源及び生長、其の傳播及び持續等の諸過程の研究が、社會學の研究を構成するので、要するに社會學とは、文化的影響或は勢力の言葉に於て説明を與へる人間行動の研究への接近である。(Sociology is the approach to the study of human behavior that offers explanation in terms of cultural influences.)

文化の概念 ウィスラーは文化を「一の人民の生活の様相」the mode of life of a people として定義して居るが、文化の一般的定義としては夫れで可いと思はれる。そうして此の文化の定義には、二つの重要な點が含まれて居る。(1)「生活の様相」とは、限定されたる地理的範域の中に、即ち文化人類學に於て文化地域 (culture area) と稱せられるものの中に、生活する人民の一團體の生活の様相を云ふのである。そうして世界は、一般に行はれる「生活の様相」の差異によりて相異なる、幾多の地理的範域に區別され、各地域に於て一定の類型的形式を現示する此の「生活の様相」は、其の地域内に生活する諸個人の獲得反應(神經筋肉的及び神經心理的)に於て表現されて居る。かくて吾人は習慣の分布を研究することによりて、夫れ夫れの文化地域の地理的境界を定めることが出来る。(2) 一定の文化地域内に生まれ又生長する何れの個人の習慣も、常に其の地

域内に於て既に成熟せる人々の習慣に合致して發達する。個人の習慣は決して夫れ自身によりて決定されて居るものでなく、夫れは團結せる團體成員の既定の習慣の反映にして、夫れ夫れの地域に於て、團體成員の習慣の總體が變はるにつれて變はつて居る。そうしてそうである以上、又そうであると云ふ意味にて、個人の習慣は超個人的である。一個人の習慣は他の個人の習慣と密接に集結され、他の個人の習慣は何れの一個人をも絶へず襲ふ恒定的刺激であるので、かくて何れの一個人も彼れ自身の習慣から、即ち他人に於て彼れ自身の行動の刺激である處の其等の習慣から、全く解放されることは出来ない。そうして文化社會學者が、文化は超個人的或は超有機的であると云ふのは、即ち右の意味に於てである。

文化複合 (culture complex) 及び文化模型 (culture pattern) 一の文化地域に於ける個人の行動を理解し、或は説明する爲めに必要なることは、人民の生活の様相を構成する其等の共同的及び相互關係的諸習慣を分析することである。そうして此の分析は、文化の諸要素を構成する文化特徴 (culture traits) の言葉、即ち根本的には個人の神經系統に於て成立する習慣の言葉に於て、行はる可きである。文明は其等の文化特徴の數及び形の異なるにつれて異なるものである。併し文化特徴の數は無數であるが故に、之を一々枚舉することは實際上不可能である。しかも相連合して居る文化諸特徴、即ち文化複合 (culture complex) はよりたやすく研究し得られる。そうして

一切の文化に共同的なる基本的諸複合を分類せんとする企だてが、幾多の人々によりて行はれて居るが、恐らくはウイスラーの企だては最も成功せるものかと思はれる。夫れは言語、物質的諸特徴、藝術、神話及び學問、宗教的慣習、家族的社會的組織、財産、政治及び戦争等の九部類に分つ分類である。併し文化の基本的複合は如何に分類されるにせよ、一定の文化地域の諸複合を整理する爲めには、吾人の特に注目すべき二つの事柄がある。(1) 一の文化地域の總ての諸複合は、相互に密接に關係して居るので、かくて文化の一部門に於ける特徴の變化は、文化の總ての方面に反動するのである。要するに一の文化とは相互關係的及び相互依存の習慣諸模型或は諸反應の一體系である。(2) 總ての文化地域に於て、一定の文化複合は他の文化複合に對して補助的地位に立つて居ること、換言すれば一定の文化複合は第一次的なものにして、他の文化複合は夫れに對して第二次的なものであることが發見される。かくて吾人は第一次的な複合を、中核複合(core complexes)と稱することが出来る。現代文明國にありては、金儲け、科學、器械、政治的民衆主義、大衆教育、及びスピード等と連合する諸習慣は、宗教的、藝術的、封建的、文學的等々と稱せられる習慣よりも、より強く且つより多く作用する。前者に對しては他の諸習慣は第二次的である。他の諸人民にありても、一般の習慣諸體系の間に同様な關係が存立する。例へば東部亞弗利加に於ては家畜複合(cattle complexes)は生活の様相の中核となつて居る。そうして只

行動の研究によりてのみ觀察される處の、習慣的諸反應の相互形成或は形勢 (the configuration of habitual responses) は、文化模型 (culture pattern) と稱せられる。されば各文化は一定の文化模型によりて特質附けられて居ると、云ひ得られるのである。

文化の諸特性 (1) 文化は累積的であること、即ち文化の累積性。何れの文化地域にありても年月を経るにつれて新しき文化特徴が發達して、古き文化特徴に加はる。又古き習慣は廢るが、其の知識は失はれない。かくて「文化基底」(culture base) は絶えず増大する。そうして社會的變化とは、つまり文化特徴の變化或は増加を意味する。各世代に於て或個人が發明をなし、即ち新しき習慣を作り、夫れが先づ他人に摸倣され、或は教へられ、次に同世代又は次世代の他の人々に對して刺激となる。そうしてかくの如くにして傳へられる諸習慣が、一の團體の社會的世襲財産となるのである。(2) 右の如くに習慣が後に傳へられ、持續されることが、即ち「文化的連續」(cultural continuity) を確立すること、即ち文化の連續性。文化的連續に付て注意すべきは、一定の文化模型を構成する文化諸特徴の特殊な相互關係即ち相互成形は破壞されても、其等の諸特徴或は諸習慣其物は後に傳へ得られることである。例へば羅馬文化模型は消失したが、併し之を構成せる文化諸特徴は今日までも存續して居る。詳しく云へば其の中の或者は既に廢つて實行されて居ないが、併し其の知識は保存されて居る。(3) 人間は可動性 (mobility) を有するが故に、文化

特徴は地球上に廣まること、即ち文化の可動性。一の文化地域の慣習は、他の文化地域に於て採用される。各文化特徴は或個人が夫れを發明せる點に於て生起するものにして、理論的には總ての文化特徴或は文化複合の歴史は、跡つけ得られる可きである。(4)文化特徴の累積性、連續性及び可動性の研究によりて明かに示される如く、其等の諸過程は何れの一定の個人にも依存せず、又其等の諸過程の各階段に於て、各個人は他の諸個人によりて確立されたる習慣によりて制約されて居ると云ふ意味にて、超個人的であること、即ち文化の超個人性。個人は歴史的には一の興へられたる點に於て生活を始める。そうして累積の過程に於ける各階段は、結果であると共に又原因である。一の習慣は他の習慣から發達し、又變化されて他の習慣となる。(器械的發明の發達の累積に依存して居ることを特に明瞭に示して居る。其の發明の各階段は特殊な一個人によりて遂行されるが、併し其の個人の才能は如何に勝れてゐても、必須なる前件が確立された上でなくば、彼は何れの階段をも遂行し得ない。そうして發明者は傳へられたる文化を利用し、又夫れによりて制限されて居るから、發明は當然一の社會的過程として考へ得られ、社會學的に研究し得られるのである。かくて發明は超個人的であると云ひ得られる。即ち發明は一定の發明者によりて成就されるのであるが、夫れは其の發明者が何等の貢獻もなさなかつた諸發明の一系列の累積を現示するのである。)

文化の決定主義的方面 (die deterministic aspect of culture) 文化は超個人的なるものであることの當然の系論として、文化の決定主義的方面が承認さる可きである。何れの文化複合も長い累積的歴史を有し、そうして夫れに於て新たに附加される各文化特徴は、個人が現存の類型から少しでも外れ或は離れることを、益々困難ならしめる。個人の生存は彼の屬する團體の基本的共同諸

習慣を獲得することによりて營まれるものにして、何人も自から自由に選擇することが出來ず、其の行動は一般に承認されて居る規範に従はねばならぬ。されば常に一定の文化複合を中核として形成されて居る團體の文化は、新しき文化特徴が附加される場合に、之を制限する一因素として作用するので、かくて新しき文化特徴は、只現存する習慣と集結され得るものである限り文化の一部分となるのである。新しき文化特徴の受容は、單に一個人の習慣の變化によりて行はれるものでなく、團體の他の諸個人の習慣によりて制約されて居るがまゝの個人の習慣の變化によりて、行はれるのである。そうしてまさしく右の意味にて、何れの團體の文化をも超個人的なるものと認めることが、正當であると思はれ、又其の超個人的方面の當然の系論として或は歸結として、文化の決定主義的方面が承認されるのである。

團體行動の分析の方法及び其の原理 文化社會學は文化の超個人性を認め、又夫れに基いて文化の決定主義的作用を認めるのであるから、團體行動の分析及び説明に於て、其の決定因素及び説明因素として、文化を最も重要視するのは當然である。かくて文化社會學の團體行動の分析及び説明は、つまり文化的諸勢力の派出物或は結果としての人間行動は、只文化の分析によりてのみ理解し得られ、文化現象の説明は文化の言葉に於て言述されねばならぬと云ふことを原理として行はれるものである。何れの發明の出現も、只文化累積の言葉に於てのみ説明し得られ、文化の

特殊的諸形態は、只先行諸形態の言葉に於てのみ理解し得られるのである。されば個人の團體を含有する何れの行動事態に就ても、或は何れの團體行動に就ても、之を分析し、説明せんとするに當つて、吾人の用ゆ可き適切なる方法は先づ第一に、夫れに於て作用すると思はれる文化的諸因素を突きとめ、確かめることである。そうして然る後に吾人は生物學的或は心理學的或は其の他の言葉に於ての説明を企だてる可きである。行動が内有的及び文化的二因素の結果であると思はれる場合に、先づ文化的言葉に於て説明を企だてずして、直ちに内有的特性の言葉に於て説明を企だてんとするは、方法論上不健實なる方法である。此の事は一文化内の團體行動を研究する場合にも、亦異なる文化に於ける人間行動の差異を對比する場合にも、同様に眞實である。又右に述べし處によりて知られる如く、歴史的方法是文化分析に於て甚だ重要なものにして、文化特徴及び其の傳播の歴史、並に他の文化特徴との相互關係は、文化的説明に於て必要缺く可からざるものである。

私は今日米國文化社會學の特質を最もよく發揮すると思はれる方針の基本的概念及び原理を、大體に於て上に述べしが如きものと認め、そうして次に夫れに關して起れる同國社會學者間の論争を考察し、終りに私自身の批判を加へたいと思ふ。